

感染症

相双地域感染症発生動向調査週報(2026年第16週)

(令和8年4月13日～令和8年4月19日)

令和8年4月23日

定点報告(上段:定点当たり/下段:報告数)、全数報告(報告数)

区分	疾病名	2026年					2025年 合計	2024年 合計
		13週	14週	15週	16週	合計		
定点報告	インフルエンザ	1.33	1.33	0.67	1.33	—	—	—
		4	4	2	4	580	2,558	1,616
	新型コロナウイルス感染症(COVID-19)	2.00	0.33	1.33	1.33	—	—	—
		6	1	4	4	109	1,139	3,622
	RSウイルス感染症	2.00	0.50	—	1.00	—	—	—
		4	1	0	2	23	156	309
	咽頭結膜熱	—	—	—	—	—	—	—
		0	0	0	0	2	78	337
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	3.00	1.50	2.50	2.50	—	—	—
		6	3	5	5	63	243	657
	感染性胃腸炎	2.00	1.50	—	1.00	—	—	—
		4	3	0	2	102	430	610
	水痘	—	—	—	—	—	—	—
		0	0	0	0	4	10	6
	手足口病	—	—	—	—	—	—	—
		0	0	0	0	0	15	952
	伝染性紅斑	—	—	—	—	—	—	—
		0	0	0	0	0	141	0
	突発性発しん	0.50	0.50	0.50	0.50	—	—	—
		1	1	1	1	12	59	182
ヘルパンギーナ	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	0	4	19	
流行性耳下腺炎	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	1	10	13	
急性出血性結膜炎	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	0	0	0	
流行性角結膜炎	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	0	2	9	
感染性胃腸炎(ロタウイルス)	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	2	16	1	
クラミジア肺炎	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	0	0	0	
細菌性髄膜炎	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	0	0	0	
マイコプラズマ肺炎	1.00	—	—	—	—	—	—	
	1	0	0	0	10	42	16	
無菌性髄膜炎	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	0	0	0	
インフルエンザ入院	—	—	—	—	—	—	—	
	0	0	0	0	7	39	19	
新型コロナウイルス感染症(入院)	1.00	1.00	—	1.00	—	—	—	
	1	1	0	1	21	56	120	
急性呼吸器感染症(ARI)	43.33	29.33	39.33	54.00	—	—	—	
	130	88	118	162	3,115	8849	—	
全数報告	百日咳	0	2	0	0	7	141	0

カラー流行表示は、福島県感染症発生動向調査週報(IDWR)の表示をそのまま表示しています。

インフルエンザ	相双地域は前週と比較して増加しましたが、県(県内総数)は前週と比較して減少しました。本県における第16週の定点当たり報告数は1.35と、10週連続で減少しました。
新型コロナウイルス感染症	相双地域は前週と比較して横ばいであり、県(県内総数)は前週と比較して増加しました。直近2年間の同時期より低い水準にあるものの、他疾患と同様、基本的な感染対策が重要です。
無菌性髄膜炎	本県で1例報告がありました。昨年と比較して、2026年現時点での報告頻度が高い傾向が見られます。無菌性髄膜炎は、髄液中に細菌が検出されない、ウイルスや非感染性疾患が原因となる髄膜炎です。ウイルス性の場合では、エンテロウイルス、ムンプスウイルス及びヘルペスウイルスが主な病原体であり、接触感染、経口感染、飛沫感染で伝播し、感染力が強い傾向にあります。手洗い、うがい、消毒等のウイルスへの基本的な感染対策が重要です。
結核	本県で3例報告がありました。昨年と同様、高齢者や外国出生者が多くを占めている状況です。外国人労働者を多く雇用する事業所や高齢施設は、既存の感染対策に加え、結核対策としての定期健康診断を実施しましょう。
E型肝炎	本県で1例報告がありました。E型肝炎は、E型肝炎ウイルスに汚染された水や加熱不十分なブタやイノシシ等の動物の肉を摂取することで感染し、腹痛、黄疸等の症状を生じます。予防法として、豚肉や猪肉のジビエ肉の十分な加熱や、手洗い等の衛生管理の徹底が重要です。
播種性クリプトコックス症	本県で1例報告がありました。真菌のクリプトコックス属が病原体となる疾患で、真菌を含んだほこりを吸引することにより、主に免疫機能が低下した方が発症します。人から人へ感染することはありませんが、発熱、頭痛、咳から、肺炎、脳障害によるけいれん、意識障害等まで、症状も多様です。熱帯地域等の流行地での土ほこりの吸引には注意が必要です。また、免疫機能が低下している方は土ほこりの吸引や鳥のふんの接触を控えましょう。
つつが虫病	本県で1例報告がありました。つつが虫病は、病原微生物を保有するツツガムシ(ダニの一種)に刺された後、1～2週間後に発症します。人から人へは感染しません。主な症状として発熱、発疹、刺し口(刺された部位がカサブタに変化)、頭痛、倦怠感、肝機能障害などがあります。治療が遅れると重症化や、最悪の場合死に至ることもあるため、早期診断・早期治療が重要です。山林や草むら、農耕地に入る機会が多くなる春季(3～6月)と秋季(9～11月)は注意が必要です。野外作業時は長袖・長ズボン・長靴等を着用して肌の露出を少なくし、作業後は速やかな入浴や着替えを心がけましょう。また気になる症状が現れた場合には、速やかに医療機関(内科、皮膚科など)を受診しましょう。
麻しん	県内での発生は確認されていませんが、国内の感染者数が増加しています。麻しん(はしか)は麻しんウイルスによる感染症で、感染すると咳、鼻水、高熱、発しんが生じます。空気感染が主な感染経路であり、極めて感染力が強く、免疫を持たない人が感染者に接するとほぼ全員が感染します。手指消毒やマスクのみでは予防することができません。最も有効な予防法は、ワクチンの接種です。海外からの輸入事例がほとんどであることから、特に海外へ出張・旅行に行く方は、ワクチン接種(2回)の有無を確認し、感染に十分注意しましょう。

大型連休を利用した帰省や旅行等で人の移動や接触の機会が増えることが予想されます。体調管理に留意することや、咳エチケットや手洗いの励行、場面に応じたマスクの着用など、基本的な感染対策をお願いします。

(参考・引用) 福島県感染症発生動向調査、感染症週報、2026年第16号